



幻装神姫
Starry from the miracle princess
天草白

催眠に穢された聖性

天草白 挿絵 宮代龍太郎

試し読み版

18
未 満

第一章	催眠の罟！ 変身ヒロインのフェラチオ奉仕	006
第二章	穢された聖性！ 変身ヒロインの処女喪失	060
第三章	屈辱の敗北！ 変身ヒロインの肛虐	113
第四章	引き裂かれた恋心！ 変身ヒロインの寝取られ姦	165
第五章	背徳と享楽の輪姦！ 変身ヒロインの陥落	201

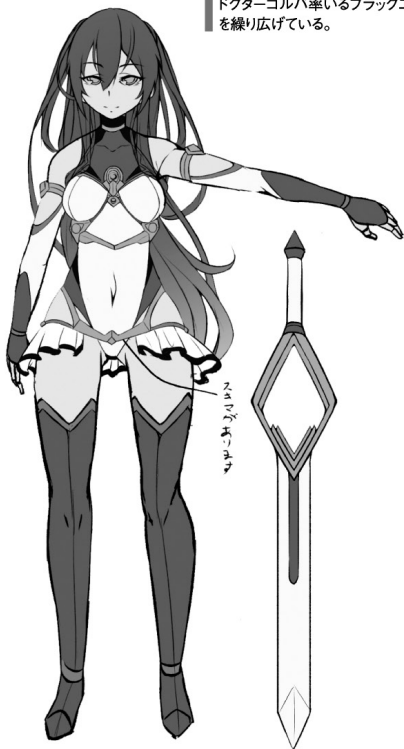
登場人物紹介

Characters



ひ す み と う か 火澄桃香 / フェアリーフレア

メインヒロイン。正義のヒロインフェアリーフレアとして
ドクターゴルバ率いるブラックエデンの怪人たちと戦い
を繰り広げている。



第二章 催眠の罫！ 変身ヒロインのフェラチオ奉仕

赤い人影が無機質な造りの回廊を駆け抜けていく。遠くから、侵入者を示す警報サインやいくつもの怒号や喧噪が聞こえた。

「侵入者はどこだ！」

「忌々しいフェアリーフレアめ！」

「必ず見つけて八つ裂きにしろ！」

変身スーツの力で常人の十倍以上に強化された聴力は、敵のやり取りの一つ一つを鮮明に捉えていた。どうやら《黒い楽園》ブラックエデンの戦闘員たちは見当外れの場所を搜索しているようだ。

「陽動作戦は成功したみたいね」

つぶやいた人影——その少女は美しかった。

年の頃は十代後半だろうか。凛々しい美貌を彩るツーサイドアップの赤い髪。勝ち気な光を宿す切れ長の青い瞳。敵地の真つただ中にありながら、芸術的なまでに整った顔立ちには畏怖の欠片もない。浮かんでいるのは強い闘志と不敵さだけだ。

可憐な印象を与える戦闘スーツに包まれた長身も、容貌と同じく凛々しくも美しいプロポーションを誇っていた。

胸元にあしらわれた金の縁取りがなされた緑の宝玉が、薄暗い基地内で幻想的なきらめきを放つ。白と赤に彩られたレオタード状のスーツは身体に密着するように張りつき、豊かに盛り上がったDカップの双丘や見事に括れた腰つき、引き締まったヒップラインまでを忠実に浮かび上がらせていた。

真紅のアームスリーブと膝上まであるブーツに覆われた四肢はすらりと伸び、スカートがはためくたびに艶めかしい太ももが露わになる。

「罪もない人たちを捕まえて人体実験に使おうとするなんて……ブラックエデンのやり口は絶対に許さない」

抑えきれない思いが言葉になってあふれ出る。

ここは世界中に七つ存在するというブラックエデンの前線基地の一つ《ベルフェゴール・ラボ》。彼女の使命はその中枢に捕らわれた人々の救出と、基地の壊滅だった。

「見つけたぞ、フェアリーフレア！」

「侵入者発見！ ただちに射殺しろ！」

前方から黒ずくめの一団が駆けつける。さすがに目的の場所まで簡単にたどり着かせてくれるほど、敵も甘くないようだった。

現れた戦闘員たちは、全部で十五人。いずれも筋骨隆々とした体軀を黒いタイツスーツに包み、顔は白い縁取りのある目出し覆面で覆っている。ぎらつく無数の眼光が、侵入者であり仇敵でもある彼女——フェアリーフレアを一斉に見据えた。

「いくら貴様が強くても、この狭い通路では逃げ場はない。ハチの巣になるがいい！」
戦闘員たちがマシンガンを構える。銃弾を避けるほどのスピードを誇る無敵の変身ヒロインとはいえ、数メートルの幅しかない通路上では動けるスペースが限られていた。逃げ場はない。

「終わりだ——」

「あなたたちが、ね」

引き金が引かれようとした刹那、フェアリーフレアは床を蹴り、音速に近いスピードで突進する。

白と赤、二色の閃光と化したフレアは一瞬にして彼らに肉薄した。引き金が引かれるよりも早く、スラリと長い脚がはね上がる。マシンガンをまとめて弾き飛ばした。

「き、貴様っ……」

慌てる戦闘員たちに、フレアの拳が、蹴りが、次々と叩きこまれた。

「がはっ」「ぐ、ううっ」「ぎゃあっ」

鋼鉄すらも砕くパワーを誇るフレアの打撃には、肉体強化手術を施されている戦闘員もなすべがなかった。

瞬きする間もなく、悪の尖兵は全員床に転がった。うう、と苦しげに呻いているところを見ると、かろうじて息はしているようだ。だが、当分は立ち上がれないだろう。

フレアは戦闘員たちを一瞥いちべつすると、先を急いだ。長い通路を進み、ようやく奥までたど

り着く。

そこには鉄格子の牢に捕らわれた数十人の姿があった。幼い子供から若い男女、中年や老人に至るまで、性別も年代もバラバラの集団だ。

いずれも人体実験のためにブラックエデンに捕らわれた人々だった。

「皆、もう大丈夫よ。牢を壊すから離れていて」

フレアは鉄格子に両手をかけると、苦もなく左右に押し広げた。数人が通れるほどのスペースができるまで頑強な鉄格子をねじ曲げる。

「さあ、早く逃げて。組織の追手が来る前に」

「あんた……まさか、噂のフェアリーフレアか!？」

「ありがとう、フェアリーフレア!」

人々の感謝の声が、戦いで張り詰めて疲れた心と身体を癒してくれた。

「おっと、そいつらは大事な人体実験用のモルモットだ。勝手に逃がされては困る」

反対側の通路から現れたのは、一人の老科学者だ。

いかにも狡猾そうな顔立ちに白髪、白い髭。小柄な全身から漂うオーラは、対峙しているだけで禍々しくも不気味な印象を受ける。

「ドクターゴルバ……!」

ブラックエデンを束ねる首魁にして、世界最高峰の頭脳を誇る邪悪な科学者だ。さらにその背後から十数人の戦闘員と異形の化け物が歩いてきた。

ブラックエデンの主力兵器である『怪人』である。人間を素体とし、精神エネルギーの具現化装置である『FEDライブ』によって、禍々しい姿と超常の力を得た怪物――。

二本の角を備えた獐猛な竜の顔。蝙蝠こうものような皮膜状の翼。鋭い爪を備えた四肢。光沢のある深緑色の鱗に覆われた体躯は優に五メートルを超える。

端的に言えば、その姿は竜の頭部を備えた巨人だ。

「お前がフェアリーフレアか。組織の同胞である怪人たちを三十三人も殺した憎い女め」

「罪もない人々を苦しめ、殺してきたのは、あなたたちのほうでしょう」
フレアが凜として言い放つ。

「同胞の仇を取らせてもらうぞ。行け、ワイバーンエデン」

「お任せを、ドクター」

怪人が進み出た。背から生えた一對の翼が、フレアを威嚇するように大きく広がる。

「無理ね。あなたはここで倒される。今から、私に」

言うなり、フレアは床を蹴った。

胸元の宝玉が輝きを放ち、同時に彼女の身体能力が爆発的に増大する。一瞬にして亜音速にまで達したフェアリーフレアは怪人の背後へと回りこんだ。

「は、速い!!」

「あなたが遅すぎるだけよ」

突き出した掌底が数トンの衝撃を伴ってワイバーンエデンの背中に叩きつけられる。

「がっ!？」

苦鳴とともに五メートル超の体躯が吹き飛ばされた。鉄製の壁に激突し、クレーター状に陥没させる。

「パワーでも、スピードでも……この俺がこんな小娘に負けている、だと……!？」

「当然よ。コピーがオリジナルに勝てると思ったの？」

フレアが冷然と言いつつ放った。

「あなたたちのFEドライブは劣悪な模造品に過ぎない。私が持つ真のFEドライブの敵じゃないわ」

「ぬかせ、小娘がっ!」

怒りの声を上げて竜の怪人が向かってきた。先ほどのダメージを全く感じさせない動きだ。

「凶体が大きいだけあって頑丈ね」

繰り出された長大な尾を、フレアは身を屈めて避ける。狙いを外れた一撃が背後の壁を砕いた。鋼鉄をも砕くパワーは、徒手空拳で相手をするには骨が折れそうだった。

ならば、とフレアは右手を高々と掲げる。

「FEドライブ・アクセラレーション！ 来なさい、我が剣——ブレイジングソード！」
凜とした叫びとともに高まる精神力が、FEドライブによって加速する。

真紅の輝きが弾けた。

きらめく光の粒子が美しく舞いながら収束し、一つの形を作り出す。一瞬の後、フレアの手には幾何学的なデザインの長大な剣が握られていた。

まっすぐに伸びた白銀の刃。美しい菱形をした黄金の鏢。フレアの闘志が具現化した聖剣——ブレイジングソードだ。

一閃。ワイバーンエデンの両腕が切断され、地面に落ちる。噴水のように噴き出した血がフレアの全身を赤く染めた。

「お、おのれえっ……!!」

怪人は怒りの雄たけびを上げて全身を震わせた。両腕の切断面が盛り上がり、まるでビデオの逆回しを見るように、瞬時にして両腕が再生する。

「残念だが、俺様は不死身だ」

「無限再生能力を備えたタイプか。厄介ね」

フレアが怜悧な美貌をわずかにしかめた。

「だけど、どんな怪人もコアを砕かれれば、再生は不可能よ」

「その前に貴様を燃やし尽くす！ 食らえ！」

ワイバーンエデンが耳元まで裂けた口から炎の塊を放つ。大気がプラズマ化して焼け焦げる。超高温の炎がまっすぐに迫った。

「無駄よ。聖剣ブレイジングソードに切れないものはない——」

振り下ろした聖剣は不可視のエネルギーをまとい、炎の塊を真っ二つに切り裂く。その

勢いそのまま、フレアは怪人へと迫った。

「馬鹿な、炎すら切る剣だと!?!」

怪人は驚きの声を上げて、さらに炎を放つ。

フレアが振るう聖剣はそのことごとくを弾き、切り散らした。怪人はたまらず距離を取ろうと後退する。だがフレアが踏みこみ、最後の一撃を放つほうが一瞬早かった。

「これで終わりよ!」

裂帛れっぱくの気合いととともに、胸元の宝玉がまぶしい輝きを放つ。同時に手にした剣が赤い燐光をまとった。

「ギガフレイムザンバー!」

上段から振り下ろしたブレイジングソードの輝く刃が、ワイバーンエデンの巨体を真つ二つに切り裂く。鮮血が噴水のようにしぶき、床を朱に染める。体内のコア——FEDライプごと両断された怪人の骸むくろが重々しく倒れた。

「後はあなただけよ、ドクターゴルバ」

身体の前でXの字に聖剣を振って血糊を飛ばすと、フレアは敵の首魁に向かって剣を構え直した。

「……ふん、いい気になりおつて」

老科学者は額に汗をにじませて後ずさる。その周囲には十数人の戦闘員がいるが、いずれもフレアの敵ではない。

ブラックエデンは実質的にドクターゴルバが仕切るワンマンな組織である。彼を捕獲すれば組織は瓦解する。

「甘いわ。この私がそう易々と捕まると思うか！」

ゴルバが懐に隠し持った銃をいきなり取り出して撃った。銃口から稲妻に似た光芒が放たれる。

だが、反射神経や運動能力が常人の数十倍にも増強されているフレアにとって、銃撃を避けるなど造作もないことだ。身を仰け反らせるようにして光線を避ける。

(えっ……!?)

そこで敵の狙いに初めて気づいた。

ゴルバが狙ったのはフレアではない。彼女の背後にいる、逃げ遅れた人々――。

「卑怯なっ」

叫びながら、フレアは体を反転させた。一瞬にして亜音速まで加速。身体を投げ出すようにして、人々の前に立ちはだかり、光線を浴びる。

「くうっ……は、早く逃げてっ」

稲妻のような衝撃に貫かれながら、フレアが叫ぶ。人々が逃げ出すのを見届けたところで、両脚の力が抜けてその場にしゃがみ込んだ。

「くくく、しばらくは動けまい。今のうちに逃げさせてもらおうぞ」

銃口をこちらに向けたまま、悪の科学者が笑う。

フレアは立ち上がれなかった。身体中が痺れて力が入らない。

『催眠レベル1——視覚誤認』

不意にそんな声が響いた。

(な、何……!?)

意識が薄れて混濁していく感覚があった。視界がぼやけ、眼前のドクターゴルバの姿がぐにやりと歪ゆがんで見える。

『この通路の奥にある司令室に入ると、お前は暗示にかかる』

『レーテの基地に戻ったのだと錯覚する』

『私を味方の科学者だと誤認する』

『私の指示通りに戦闘後の精神洗浄を受ける』

『キーワードは《白銀色のニンジン》だ』

声とともに、目の前がすうつと暗くなる。

一瞬、意識が暗転していたのか——気が付くと、眼前からドクターゴルバと戦闘員たちの姿が消えていた。通路の向こうへ遠ざかる足音が聞こえる。

「逃がさないわよ！」

フレアは床を蹴って駆けだした。

変身を解いたフェアリーフレア——火澄ひすみとうか桃香は長い通路を走っていた。

変身していると大量の精神エネルギーを消耗するため、いったん解除したのだ。ブレザータイプの制服姿で走り続けた桃香は、やがて通路の奥にある巨大なドーム状の部屋にたどり着いた。

壁一面の電子機器やモニターから察するに、ここは司令室らしい。部屋の中央にある玉座を思わせる椅子にドクターゴルバが悠然と座っていた。

その左右には十数人の戦闘員が控えている。

「くくく、よくぞここまで来た、フェアリーフレア」

「もう逃げられないわよ、ドクターゴルバ！」

威勢よく叫びながらも、フレアは慎重に距離を詰めた。敵はブラックエデンの首魁である。どんな奥の手を隠し持っているか分からない。罠を仕掛けているかもしれないし、緊急避難用の隠し通路が備えてあるかもしれない。

（これが最後の戦い——私に力を貸して、研究所の皆。悠斗ゆうとくん）

仲間たちに、そしてほのかな想いを寄せる幼なじみの少年に心の中で祈り、桃香は右手に持ったペンダントを高く掲げた。

「F E ドライブ・イグニッション！ 顕現せよ、妖精の衣——ブレイジングドレス・マテリアライズ！」

凜とした叫びとともに、金のフレームに緑の宝玉がはめ込まれた美しいペンダントが眩い輝きを放つ。同時に、えんじ色のブレザーが無数の光の粒子となって弾け散った。

十代の乙女ならではの白く清らかな裸身が露わになった。滑々とした肌は眩い輝きの中で艶めいた光沢を放ち、豊かに盛り上がった魅惑の双丘が弾力感たっぷり揺れ、上下に弾む。

日頃の鍛錬の証である引き締まった腹部と芸術的なまでに括れた腰つき、そして白桃を思わせるキュツとした美尻に続くS字ラインは少女から大人の女への過渡期独特の健康美と色香を併せ持っていた。すらりとした両脚の付け根に息づくのは、黒く陰る秘所だ。

凡百の男には決して目にすることが叶わない清廉な裸身が一瞬晒された後、光の粒子にふたたび包まれた。

白と赤のレオタード状のスーツが首から胸、股間にかけてを覆う。腰回りを可憐なスカートが飾り、伸びやかな腕には赤いアームスリーブが、スラリと長い美脚には同じく赤いブーツが装着される。

最後に豊かな胸の谷間の上部に、金色に縁どられた緑の宝玉が装着されると、凛々しくも美しいフェアリーフレアの戦闘フォームが顕現した。

「心の力で炎を灯し、闇を滅する聖なる妖精！ 幻装神姫フェアリーフレア！」

正義のヒロインが凜然と名乗りを上げる。

「白銀色のニンジン」

ドクターゴルバが口元を笑みの形に吊り上げ、意味不明の言葉を告げた。

「えっ……!?!」

次の瞬間、視界が揺らいだ。眼前のゴルバが、周囲を守る戦闘員たちが、壁が、床が、天井が——ぐにやりと歪んでいく。フレアは頭を左右に振って、薄れる意識を現実に繋ぎ止めた。

「な、何……!?!」

気が付けば、周囲の景色は一変していた。殺風景なスチール製の壁に囲まれた部屋だ。壁一面に並ぶ電子機器がせわしく明滅する。白衣の研究者たちが狭い通路を忙しそうに行き来する。

「ここって、レーテの研究所……?」

つい先ほどまでブラックエデンの本拠地にいたはずなのに。なぜ、彼女が所属する組織——精神エネルギー国際研究機関《レーテ》の施設内にいるのか。

「私、いつの間に戻って来たの?」

わけが分からず、フレアは呆然とつぶやいた。

「お帰り、フェアリーフレア」

白衣を着た老人が歩み寄った。

（えっと、この人は誰だったかしら？）

誰かに——そう、自分にとつて憎むべき誰かに似ているような気がするのだが、頭が霧がかかったように思い出せなかった。

「あなた……は……？」

「何を言っている？ 私は権堂だ。FEドライブの調整をいつもしているだろう」

「そうだ、この人はFEドライブの開発主任を務める権堂博士。なぜ忘れていたのだろう。すみません、私……なぜか博士のことを一瞬思い出せなくて」

「激しい戦いで疲労がたまっているんだろう」

権堂の視線がフレアの身体を這い回る。もちろんいやらしい意味合いではない——はずなのだが、なぜ背筋がぞくりと栗立った。

※

（どうやら催眠は成功したようだな）

ドクターゴルバはニヤリとほくそ笑んだ。

フェアリーフレアは自分のことをレーテの科学者である権堂博士だと、そしてここをブ

ラックエデンの基地ではなくレーテの研究施設だと誤認している。

強力な精神防壁を持つフェアリーフレアも、これまでの戦いで消耗した状態では、新たに開発した新型の催眠光線を防ぎきれなかったのだろう。

「催眠レベル1は成功というところか、くくく」

老科学者は変身ヒロインの肢体にいやらしい視線を這わせた。

変身スーツを内側からパツンパツンに盛り上げている魅惑的な胸の双丘。臍のラインまで露わなほど密着したスーツの腹部。そして同じく尻の谷間がはつきり見て取れるほど布地が張りついた臀部。

そのすべてが十代の乙女らしい瑞々みずみずしさと、匂い立つような色香に彩られている。

我知らず下腹部に血流が集まり、ズボンの下で男根が起き上がった。老人とはいえ、ゴルバは一晚に十数回の射精をこなすほど強烈な精力を誇る。

催眠にかかり、精神的に無防備な状態の変身ヒロインという極上の獲物を前に、ねっとりとした欲情が湧き上がっていた。

（レーテに忍ばせたスパイから情報は得ているぞ。お前が戦闘後に『ある作業』を受けることを。それを利用して、心も身体もたっぷり翳なまってやる……！）

※

「作戦は成功した。ブラックエデンの基地は壊滅。残念ながらドクターゴルバは逃がしてしまっただが、敵組織の戦力を大幅に削ぐことができた。よくやってくれたね、フェアリーフレア」

「捕らわれていた人たちはどうなりました？」

作戦の顛末を語り、労ってくる権堂博士に、フェアリーフレアがたずねた。

「我々が保護したよ。負傷している者は治療したし、怪人に襲われた精神的ショックでPTSDを発症しないようメディカルスタッフのケアも万全だ」

「よかった……」

敵に勝利したこと以上に、多くの人を守れたことが何よりも嬉しい。

「後は君のケアだけだ。いつものように精神洗浄作業をしようか、フレア」

フェアリーフレアは戦闘後に必ず『洗浄』という作業を受ける。精神エネルギーの具現化装置であるFEドライブを使用した怪人との戦いでは、常に精神攻撃にさらされることになる。そのため、戦いの後には軽度の精神汚染が残ってしまう。

具体的には、怪人が発散する邪悪な精神に、フレアの精神が浸食されてしまうのだ。放っておけば、彼女の心に悪影響を及ぼし、最悪の場合には正義の変身ヒロインが邪悪な魔女になりかねない。

だから戦闘後には研究所のクリーニングマシンでその汚染を洗い流す作業が必要となる。「戦闘スーツのままでは膣内や直腸の洗浄ができない。股間部分だけスーツを解除してく

れるかね？」

「老科学者が事務的な口調で言った。

「君も知つての通り、洗浄は肌だけでなく口腔や膣、腸といった体内の粘膜にも行う必要がある」

戦闘後に必ず行っている行為とはいえ、フレアは年ごろの乙女である。相手が老人であろうと、異性の前で股間を晒すのは抵抗があつた。戦闘のときの凛々しさが嘘のように、両脚が震えてしまう。

「放っておけば、怪人の邪悪な精神エネルギーに君の心と体が浸食されてしまうよ？」

「は、はい……ブレイジングドレス、部分解除」

フレアは顔をこわばらせながら、戦闘スーツの一部を解除した。精神力で具現化したスーツは彼女の意志で元のブレザーに戻すことも、また一部だけを解除することも可能だ。

フレアの意志に反応して胸元の宝玉が淡く光った。レオタード状のスーツの股間部だけが消え失せ、淡い陰毛で飾られた恥丘や秘所が露わになる。

「ああ……」

羞恥が高まり、フレアは熱っぽい息をもらした。戦闘スーツに付属するスカートは両腰を覆うタイプで、股間はほぼ剥き出しである。丸出しになった大事な部分を、フレアは反射的に両手で隠した。

「では、そこの台に上がってくれたまえ」

老博士が指示をする。なぜか背筋がゾクツとするような嫌な予感を覚えつつ、フレアは病院の診療台を思わせる台の上上がった。

「さあ。手をどけて、脚を開くんのだ」

「は、はい……」

洗淨用のノズルはシャープペンシルほどのごく小さい径だ。挿入されること自体は慣れているのだが、両脚を開けば老科学者に丸出しの股間を覗きこまれることになる。

作業のために必要な行為だと頭では分かっているが、やはり恥ずかしくてたまらなかつた。両脚を開くことも、股間を隠した両手をどかすことも、どうしても抵抗があつた。

「どうした？ 愚図愚図していると精神汚染が始まらないとも限らない。恥ずかしいのは分かるが、これは君自身の安全のためなんだよ？」

老科学者に重ねて言われ、フレアは羞恥をこらえて両脚をM字に開いた。恥辱が増して太ももの内側がじつとりと汗ばむ。

フレアは震える両手を脇にどかせて、乙女の秘園を露わにした。ぴっちり閉じた二枚のラヴィアから十代の少女特有の甘い汗の匂いが立ち上る。

「じゃあ、洗淨を始めようか」

立ち込める芳香を嗅ぎながら、博士が台の上に入った。身を屈めてフレアの股間に顔を寄せてくる。

「えっ、ちょっと——何をやってるんですか!？」

ハアハアと荒い息が陰毛をそよがせ、内ももをくすぐった。股間に顔を寄せてくる老科学者を、フレアは呆然と見つめた。

「洗浄にはノズルを使うんでしょう？ どうして顔をそんなに近づけてるんですか……？」

「何を言っている。これはノズルじゃないか」

こともなげに告げて、ヌメヌメとした舌がフレアの内ももを軽く舐めた。

「ん、ふああっ……！ やだ、あ……」

老人の舌がヌチャヌチャと唾液をまぶしながら内ももを這い回る気持ち悪さと、両脚が痺れるようなくすぐったさで下肢がゾワリと粟立った。

同時に視界がぐにやりと歪む。

「……そ、そうですね。私ったら何か勘違いしていたみたいです。すみません……」

舌のように見えたが、やはり洗浄用のノズルだった。やけに生暖かい感触にかすかな不審を覚えつつも、フレアは両脚の力を抜いてさらに開脚の角度を大きくする。

「——くくく、私の舌がノズルに見えるか。催眠の通り、誤認してくれたようだな」

そんな声が聞こえた気がしたが、何のことかフレアには分からなかった。

「じゃあ、続けるよ。変身ヒロインへのクンニリングス——いや、精神汚染の洗浄をね」
温かなノズルが花びらを左右に広げながら、こじ入れられる。舌のような感触は気のせいだろう。軟体動物のようにヌメヌメしたものが繊細な膣壁をよりわけ、粘膜をぞろりと

舐める。

「くは、ああっ……！ 何か、入ってくるう……！ きゃ、はあ……あんっ、ううっ……」
胎内を甘くまさぐられる心地よさに、フレアはびくんと両脚をはね上げて喘いだ。

（なんだか男の人の舌でアソコを舐められている気分。こんなこと考えるなんて、私っただら……）

もしかしたら精神汚染で思考を淫らに染め上げられているのだろうか。膣孔に不思議な心地よさを感じ、フレアは我知らずビクンと両脚を震わせる。

ずぶ、ずぶ、と侵入してくる柔らかな感触が膣壁に微妙な圧力を与えてきた。強烈な異物感に最初は怖気を覚えたものの、徐々に甘痒い波が粘膜に染み渡り、愉悦となって秘孔全体を浸食する。

「今日はいつもより汚染が多いな。時間をかけてじっくり作業するからね」

ハアハアと息を乱しながら権堂が告げた。尖った先端部が狭苦しい膣洞をこじ開けながら、さらに奥まで押し入った。

今や完全に根元まで突き入れられ、熱い侵入者を受け入れて乙女の褰がざわめいていた。「はあんっ！ 中っ、擦れてえ……ゾワゾワするう」

膣孔を柔らかな肉塊のような感触でまさぐられる未知の感触に思わず声ももれた。

処女ならではの生硬な褰肉が少しずつほぐれ、蠢きながらノズルを奥へと招き入れる。意図しての動きではなく、女としての生理的な反応だった。

「くくく、甘酸っぱい汁がもれてきたぞ」

老科学者の含み笑いで、秘孔の最奥からヌルヌルしたものが分泌され始めていることに気づく。

（やだ、私——いつの間に、濡れて……？）

フレアとて思春期の乙女である。生理期間の直前などに、やけに股間がムズムズして指で慰めた経験もないわけではない。だが、そんな数少ないオナニーの体感と、今感じている腔洞を甘痒く揺さぶる波は全くの別物だった。

指とは明らかに違う、熱く柔らかな感触。それが内側から繊細な粘膜を圧迫し、心地よい刺激を送りこんでくる。下半身が妖しく火照り始めていた。

「初々しい反応だ。フレアは処女なのかな？」

「えっ？」

突然の質問にフレアは顔をこわばらせた。その間も腔内を柔らかな感触でまさぐられ続ける。

「おっと、いやらしい意味で聞いているんじゃないぞ。FEドライブの起動には精神面が大きくかわってくる。君のメンタルコンディションを整えるためにも、プライベートを知っておく必要があるんだ」

「だ、だけど、そんなことまで……んっ……言わなければ、いけないんですか……ふああ」
秘孔を間断なく襲う心地よい痺れに喘ぎながら、フレアがたずねる。頭の芯がぼうっと

なり、茹だつたように火照り出す。その熱が全身に広がっていくのと同時に、理性が薄く
なっていくのを感じた。

「もちろんだよ。女性にとつて恋愛が占めるウェイトは大きい。純潔を捧げるような恋人
がいるのであれば、そちらの管理も必要だ」

「い、いえ、処女……です。男の人とは、付き合つたことがないので……」

恥ずかしさで顔が熱くなるのを感じた。

「ほう、これだけの美少女だというのに男性経験ゼロか。ますますそそる……おっと、な
んでもない」

老科学者が笑つた。柔らかな肉のような感触が秘孔から引き抜かれる。ぬちゃつ、と濁
つた音がして、膣口から透明な液が糸を引いているのが見えた。

ふんと鼻腔に漂ってくる甘酸っぱい匂いは、フレアがもらした愛液の香りだ。

「次はこつちの反応も試すとしよう。おっと、あくまでも洗淨行為だよ、これは」

老科学者がふたたび股間に顔を寄せる。熱い息がクレヴァスに吹きかかり、肌が粟立つ
ようなくすぐつたさを感じた。怖気と紙一重のくすぐつたさは、今にも快感に転化しそ
うで、ラヴィアが震えてざわめく。熱い肉の感触がぴっちり閉じた二枚の花びらを滑り、そ
の上部にたたずむ肉芽に到達した。

包皮に包まれたクリトリスを火照つた感触で圧迫される。柔らかな感触の上に乗せられ
た肉豆を転がされると、ジンと痺れるような快感が走つた。敏感なクリトリスを何度も転



がされ、その摩擦刺激によって充血現象を起こしてムクムクと肥大化を始める。

「んあぁ……！ あ、ふうん……気持ち、いい……」

洗浄作業だというのに、性的な快感を得てしまっている。自分の身体の淫らさを自覚して、フレアは背筋がゾクツとなった。

（こんなの、おかしい……いつもの洗浄でこんな風を感じたことなかったのに……!?!）

頭の片隅に不審がよぎるが、増大する快楽の前にすぐに吹き飛ばされてしまう。

「ふむ、いつもより感じやすいな。怪人との激戦の影響か？ 少し触診して調べる必要がある」

老科学者は顔を上げると、指先でクリトリスを摘まんできた。包皮を剥いて、美しいルビーを思わせる肉芽を剥き出しにする。充血して二倍ほどに膨らんだそれを親指と人さし指の間に挟んで圧迫する。

包皮の上からでも十分すぎるほどの快楽刺激だったというのに、今度は直接クリトリスに触れられている。甘美な圧力は先ほどまでの比ではなく、恥豆が何度も妖しい脈を打った。下腹部の芯が焼けるように火照り、性悦の熱は太ももからふくらはぎにまで広がり、爪先にまで達する。

「くひいつ！ あふうつ……！ はあぁつ、ふあおつ……んんんうつ……!」

もはや堪えることができず、フレアは盛大な喘ぎ声を上げてしまう。

ふたたびクリトリスを親指と人さし指で擦り転がされた。先ほどよりも強い圧力に伴い、

倍加した快感がフレアの下半身を官能の炎で煮えたぎらせる。

「くううううっ！ はあ、あふうん……う、はあ」

すらりとした両脚をはね上げ、引き締まった腰を波打たせながら、フレアは清楚な乙女らしからぬ欲情の声を奏でた。

老科学者はニヤニヤ笑いを深めて、変身ヒロインの痴態を見下ろしている。

「よし、次は直腸の洗浄に移ろうか」

「えっ、まだ……続く、んですか……？」

フレアはハアハアと乱れた呼吸を整えながら、呆然とたずねた。

「当然だ。いつもそうしているだろう。全身の肌だけでなく体内の粘膜にまで奴らの精神汚染は侵入してくる。膣や直腸から口の中や耳孔、鼻腔の粘膜に至るまですべて洗浄する必要がある」

科学者は当然のような口調で説明する。

「さあ、四つん這いになって。私に向かって尻を掲げるんだ」

「は、はい……」

言われた通り、台の上で両手両膝をつき、臀部を高々と掲げた。まるで交尾するときの牝のようなポーズに頬がカーッと熱くなる。

そう、これはいつもやっている作業なのだ。だが普段の洗浄はもっと機械的な行為だった。もちろん今日のような鮮烈な快感を覚えたことは一度もない。

(今日に限って、どうして)

混乱するフレアの尻たぶを熱く柔らかい感触が撫でた。滑らかな尻肉の曲線に沿って、赤い舌が這い回っている——？

いや、一瞬舌のように見えたが、これは洗浄用のノズルだ。ノズルのはずだ。

だが唾液のようなヌメリと柔らかい肉の感触は、尻を舌で舐められているとしか思えず、ますます混乱する。くすぐったさと心地よさが同居した妖しい触感で下腹部がひとりでに
痙攣した。

「は、博士、何を——」

「直腸はデリケートな器官だからね。ノズルを挿入する前に周辺の筋肉をほぐさないと」
老科学者が真面目な口調で告げる。

「君の身体を傷つけないための、最善の処置だ。ほら、もっと力を抜いて」

「ありがとう、ございま……ひあああんっ!! ああああつ、おふうっ! ふああおつ……!!」

自分の身体を氣遣ってくれる科学者に感謝しつつも、尻肉を、ぴちゃ、ぴちゃ、と舐められる感触がふたたび訪れ、下半身の震えが止まらなくなった。

「特にここは念入りにほぐす必要がある」

「ん、くふうっ!! ひいいんっ! そ、そこっ、だめえ、あふうん……あ、いぎいっ!」

火照った肉がデリケートな肛門の周辺をくすぐった。堅く閉じた^{すぼ}窄まりを柔らかいもの

まったくいやらしいケツマンコだぜ」

戦闘員がほくそ笑んだ。フレアの位置からは見えないが、指一本入れるのも苦労したほど小さな菊穴は、ペニスと同じ径にまでぽっかりと開かれ、その奥から欲望の白濁をこぼしていることだろう。

「へっへっへ、じゃあ俺も味わわせてもらおうぜ」

体液で濡れそぼったヌルヌルの肛門に新たな熱い切っ先が押し当てられた。また尻穴を犯される——快楽で甘く脱力していた四肢が反射的にこわばる。

次の瞬間、強い圧力がアナルをむりむりと拡張しながら押し入ってきた。

「は、んん……っ!!? ごお……あ……ふわあっ……」

二度目とはいえ、小さな肛穴を太い亀頭で無理やり押し広げられ、みち、みち、と腸壁を軋ませながら男のモノが入ってくる圧迫感は、アナルバージンを奪われたときと何ら遜色がなかった。

きつい。口から内臓が飛び出しそうだ。本来の機能である排泄とはまったく逆の——異物を腸内深くへ押し入らせるといふ行為の不気味さとおぞましさと、全身の産毛が逆立つ。「ふううっ、全部入ったぜ。まだほとんど経験がないせいとか、キツキツじゃねえか」

戦闘員は己の男根をフレアの直腸深くに押し沈めると喜びの声を上げた。深々と貫いたまま、性急に腰を動かそうとはしない。

変身ヒロインの肛門の熱さや蠕動する腸内による締めつけを、まずはじっくり味わおう

というのだろうか。

だが、フレアからすれば、それは生殺しに等しい行為だった。なんといっても先ほどめくるめく絶頂を味わわされた直後なのだ。

理性とは裏腹に、女としての身体はさらなる快楽を自然と欲し、引き締まったヒップを無意識に左右にくねらせてしまう。まるで男の抽送を急かすように。せがむように。

「おいおい、そんなに動いてほしいのか？ 物欲しそうにケツ振りやがって」

「っ……!!? う、嘘よ、私、そんなこと……」

抗弁しようとしたが、その声は自分でも驚くほど弱々しかった。指摘されるまでもなく気づいていた。己の意志に反して、自然と尻丘が揺れてしまっていることを――。

「さっきまで後ろは処女だったくせに、もうケツを犯される気持ちよさに目覚めたみたいだな、へへへ」

戦闘員の嘲笑にフレアは言い返せなかった。

その間も腸内を襲う甘い波は増大する一方だ。ペニスの抜き差しが始まれば、先ほどのような快感をまた味わえるに違いない――妖しい期待でフレアの腸内はまるで墮のようにざわめく。精液を搾り取ろうとするかのように粘膜が波打ち、蠕動を強めてしまう。

「よしよし、今犯してやるからな。くらえっ」

戦闘員の肉棒が肛門内部で動き始めた。思っていたよりスムーズな抜き差しで、ぬかるんだ直腸を肉の怒張でかき回される。最初の男から腸内にさんざん抽送を受け、ペニスの

形や感触を馴染ませられたせいで、腸壁はすでに柔らかくこなれていた。

「あふつ、あうんつ……く、くるう……ん、ぐあ」

男の突き込みに合わせて、フレアは白桃のようなヒップを遠慮がちに振った。

まるで性器のように粘膜を妖しく波打たせながら、深々と潜りこんだ男根に絡みつき、絞っていく。フレアが意図してのものではない。直腸がまるで独自の意思を持つように、ひとりでに波打っているのだ。

「やあ、私の、おし、りい……なんだか、変なお……お、ごほ……おお……ん、くああつ……」

フレアは惑乱の声を上げつつも、しっかりと腰を打ち振って男の抽送を迎え撃ってしまふ。二度目のアナルセックスだけあって、先ほどよりも落ち着いて肛門性感を甘受する余裕が生じていた。

腸内に響く甘い搔痒感がたまらなく心地いい。肛門を貫かれて快感を得るなど、変態そのものだ。変身ヒロインにあるまじき痴態だ。

頭ではそう理解していても、身体の反応は抑えきれなかった。全身が妖しく火照り、じつとり滲んだ汗が甘酸っぱい香りを周囲に漂わせる。

「あぐう、ふ、が、おお……あふう、んつ……！」

処女を奪われて以来、蕾から開花するように牝の性感に目覚め始めた乙女の身体は、熱い怒張が直腸に抜き差しされるたびに、めくるめく官能の渦に巻きこまれていく。



「まったく、ケツの穴をチンポでほじられるのがそんなにイイのかよ。ああ、もうたまらねえ」

手持ち無沙汰な戦闘員の一人がいきり立った剛直をフレアの口元に突きつけてきた。

「んっ、ぶうっ!! ご、ふうう……おお……」

あつと思う間もなく、可憐な唇を押し割り、熱い肉塊が口内に侵入してきた。亀頭全体が溢れる我慢汁でヌルヌルとしていた。

饅えた臭いと塩辛いカウパーの味が、口の中に同時に広がる。

スリコギを思わせる太い肉棒はフレアの口蓋を突き上げ、口内の占拠を広めつつ、粘膜を掘削するように一直線に突き進んだ。

「あ、ご、あつ……ご、ぐっ!! けふ、うっ……!!」

力強く喉奥を叩かれ、フレアは強くむせた。膨らんだ亀頭で喉を塞がれ呼吸もままならない。涙目でペニスを吐き出そうとするが、背後から間断なく肛膚を受けているせいで身体に力が入らなかつた。

もはや抵抗もできず、口内への深い突き込みを受け入れるしかない。

「ふぐ、ご……お……お、はあっ!! むう、ぢゅうう……」

フレアの苦悶など意にも介さず、戦闘員は口内への抜き差しを開始した。乱暴なイラマチオで喉奥までガンガン突きこんでくる。荒っぽい抜き差しに何度もえすぎながらも、半ば本能的に舌をうねらせて竿に絡みつけた。

灼けた鉄を思わせる熱さと硬さが舌肉に伝わってきた。間断なくこぼれるカウパーが舌全体に沁み渡る。生臭くて、気持ち悪くて、思わず吐き出しそうになった。

「おらっ、もつとしゃぶれ！ そらっ、くらえっ」

日頃の鬱憤を晴らそうという思いは、この戦闘員も同じなのだろう。わざと苦しむように喉の最深部を無理やり突いてディープスロットを強要する。

「あ、があ……ゆるし、て……む、れろお……」

涙目になりながらも、フレアは少しでも苦しさを和らげようと、呑み込む角度を調整する。口腔粘膜がうねり肉棒にまとわりつく感覚があった。

「へっ、可愛い口で俺のチンポをずっぽり呑み込んでやがるっ！ くおお、いいぜ！ もつと……！！」

戦闘員は増大する肉悦に声をうわずらせた。なんとか根元まで肉棒を呑み込む角度を保持し、フレアは必死で男のシンボルを吸いつける。

「む、ちゅ……ちゅ、う……く、ぷう……ん、あ」

一方で後孔を挟む戦闘員の腰遣いもいつそう激しくなっていた。腰の動きに卑猥なローリングを加え、ずちゅ、ぬちゅっ、と濁った淫音を響かせながら、熱く柔らかいアナルを肉棒でかき回す。

「くおおおっ、なんて具合のいいケツマンコだ！」

「こっちの口マンコも最高だぜ、へへへ！」

「くくく、あの学園のアイドル火澄桃香に生チンポをブチこめるなんて最高だな」

体育教師は舌なめずりをすると、いきり立った先端部でショーツのクロッチ部をずらしつつ、無防備な秘孔にびったりと押し当てた。そのまま一気に腰を押し出す。

ぐちゅううううつ、と濁った音を立てて、赤黒い肉の先端がサーモンピンクの可憐な秘裂を割り広げながら、押し進んでいく。生まれて初めて現実に目にする男女のまぐわいに悠斗は息を呑んだ。

「うああ、おあつ、だ、だめっ！　ぐう、おつ、はぐう、太いの、きたあつ！」

嫌悪に表情を歪めつつも、口元にはどこか快感を甘受するような淫蕩な笑みを浮かべた複雑な牝の表情で、桃香は叫んだ。

（う、嘘だ！　本当に挿れてる——桃香ちゃんが他の男とエッチしてるなんて！）

悠斗は幼なじみがグロテスクな肉杭で貫かれていく光景を、愕然と見つめた。

しかも下衆な中年教師に肉の杭で貫かれているのは、清楚な乙女だと信じていた恋しい幼なじみなのである。桃香の秘孔は複数の男性経験を裏付けるように、ひく、ひく、と痙攣しながら、太いペニスを易々と根元まで飲みこんでしまう。

「ふううつ、ずっぽり入ったな。ヒダヒダが気持ちよく絡みついてくるぜ。初心な処女じやこうはいかねえ。男のチンポを何本も啜えこんで経験を積んできた証拠だ、くくく」

毒島は満足げにうなると、上体を倒して桃香の唇を奪った。そのまま飢えたように腰を動かし始める。

「むうう、ぶちゅ……ぢゅううう……れるお、んむつ、れる、う、ちゅうう」

熱烈なキスを交わしながら、動物の交尾さながらに腰をぶつけ合う桃香と毒島。

結合部からひつきりなしに響く、ぐちゅ、ぐちゅ、という淫音は彼女が欲情の愛蜜をあふれさせている証だった。それだけ毒島とのまぐわいで快感を得ているのだろう。

(どうしてだよ、桃香ちゃん……こんなの、おかしいよ……！)

絶叫しそうになるのを、悠斗は必死でこらえていた。

「おい、そこを手をついて俺にケツを向ける。次はバックから犯してやる」

しばらく抽送を続けた後、毒島は身体を揺らしながら、桃香の中から己の剛棒を引き抜いた。カウパーと愛液にまみれた肉棒は濡れて妖しい光沢を放ち、むせ返るような生々しい性臭が悠斗の鼻先まで漂ってきた。

「ど、どうぞ、毒島先生……私の、い、いやらしいオマンコに……毒島先生のたくましいチンポを……つ、突っこんで、かき回してください……い……」

女体の昂りを示すように興奮で息を乱しながら、桃香は言われた通りに机の端に手をつき、毒島に向かって瑞々しい尻を突き出す。

「はははは、お前がそんな卑猥な言葉で誘ってくるなんてな！ よーしよし。望み通りにブチこんでやるぜ！」

毒島は嬉しそうにスカートをからげると、ずちゅうつ、という湿った音とともに猛々しい剛棒を桃香の内部に突き入れた。

「はふあああつ！ おおおあ……あつ、ううつ、ぐふ、ううおつ……！」

深い挿入を受けた桃香は軽く目を閉じ、心地よさそうな息をもらす。毒島は下卑た笑みを浮かべて、勢いよく抽送を始めた。ばんつ、ばんつ、ばんつ、と中年男の太ももと女子校生の瑞々しい臀部がぶつかり合うリズムカルな音が奏でられる。

「ぐうう、あうんつ……！ 深くて、強いっ！ 素敵つ、ですう、毒島先生えっ！」

桃香は心地よさそうに喘いだ。背中越しに振り返り、毒島と熱烈なキスを交わす。援助交際と言っておきながら、まるで恋人同士のように情感の籠もった濃厚な交わりだった。

（ううっ、なんていやらしい声を出すんだ、桃香ちゃん。それにすぐ気持ちよさそう）

立ちバックで犯される美しい幼なじみを見つめながら、悠斗はこらえきれずにズボンのファスナーを下ろした。すでにギンギンに勃起したペニスを引つ張り出し、飢えたように右手で抜き出す。

比べるまでもなく、毒島に比べれば貧相な肉棒だ。その器官の差異が男としての劣等感呼び覚まし、憧れていた幼なじみを寝取られている絶望をさらに加速させる。

それでも己のシンボルを慰める手を止められない。眼前で繰り広げられる、桃香の痴態は今までの人生で感じたことがないほどの背德的な興奮を呼び起こし、昂った欲情をオナニーで抑えなければ、気が狂ってしまいそうだ。

「おおおつ、ぐ、ほおつ……おおうんつ、ふぎいっ」

そのとき、毒島にバックから思いつきり突かれ、膣奥まで響くようなピストンに背中を



仰け反らせた桃香とちようど目が合った。切れ長の瞳はトロンと潤み、だらしなく開いた唇からは涎が垂れている。

「つ……！ 桃香ちゃ——」

悠斗はこらえきれずに、小さな声をもらした。

慌てて口元を手のひらで押さえる。幸い、毒島は彼の声に気づかなかつたらしい。

「ゆ……っ」

だが、桃香の方は悠斗に見られていることをあらためて意識しているようだ。切れ長の瞳に強い光を宿し、まっすぐにロツカーを——その中にいる悠斗を見据えてくる。

（桃香ちゃん、蕩けた顔してる……そんな奴に犯されてるのに、感じてるのか）

さっきの正常位では桃香の表情まではよく見えなかった。だが、こちらを向いて立ちバツクになったことで、毒島に突かれるたびに、頬を紅潮させ、気持ちよさそうに喘ぐ桃香の表情の変化の一つ一つがはっきりと分かる。

スピードに変化をつけ、さらに深く突いたり浅く擦ったりと、膣内のあらゆる性感をまさぐるような中年ならではのセックステクニックに、桃香の顔には明らかな歡喜の表情が浮かび始めていた。

「おっ、Gスポが感じるのか？ くくく、じゃあ俺がもつと開発してやろうじゃねえか。俺なしじゃいられない身体にしてやるからな、火澄」

「だ、だめ、これ以上、気持ちよく……ぎい、うぐううっ!! む、ぢゅうう、んんんっ！

あんっ、そこおとおっ！ き、気持ちいい……です、毒島せんせ、えっ！」

最初はキスを嫌がっていたような桃香が、背中越しに振り向いて自ら積極的に唇を押しつけていく。まるで自分の最深部を貫く下品な中年教師が愛おしくてたまらないと言わんばかりに舌を絡め、強く吸いつけた。

（こんなことが現実にあつてたまるか！ あれは僕だ！ 僕が桃香ちゃんとエッチしてるんだっ！）

悠斗は必死で現実を否定し、眼前の光景を妄想の映像に置き換えた。桃香と恋人同士のように熱いキスを交わし、情熱のままに身体を貪り合っているのは自分なのだ、と。

そうだ、十年以上の間、幼なじみとして過ごしてきた絆は誰にも負けない。下劣な中年教師が援助交際などで憧れの桃香を自由にするなんて、決してあつてはならない。

（桃香ちゃんはお金で身体を自由にさせるような安っぽい女じゃない。本当に愛した男だけに身体を許してくれるんだ。だから桃香ちゃんとエッチできるのは僕だけなんだ！）

『ああ、素敵よ悠斗。私が好きなのは、悠斗だけ。他の男になんて指一本触れさせないから……あふう、ん、くうううっ、そうよ、もつと突いてえ！』

脳裏に浮かび上がる映像の中で、悠斗から立ちバックで突かれる桃香は本当に気持ちよさそうだった。こちらを振り向いては、愛おしげに微笑む。ああ、僕も気持ちいいよ、桃香ちゃん。大好きな桃香ちゃん——。

甘美な妄想とともに己の肉茎を擦る手の動きもどんどんとスピードアップしていく。硬

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

ライトノベルのドキドキじゃ満足できないアナタに送る官能小説雑誌!

妄想最前線を疾走する非現実系・不思議Hコミック誌!

正義感に燃える少女達をたっぷり陵辱! ヒロインのピンチ満載!!

【偶数月】
隔月発売
2-4-6-8-10-12月

【奇数月】
隔月発売
1-3-5-7-9-11月

【電子版】
毎月配信
書籍版は奇数月
発売!



二次元
ドリームマガジン
DREAM MAGAZINE

コミック O M I C
UNREAL
アバババ

正義のヒロイン
姦獄ファイル
Sins of Heroes

あなたのキモチイをお手伝い! キルタイムのアダルトコミック誌
全国の書店・各種通販サイト、およびダウンロードなどで好評発売中!

電子書籍版も
好評発売中!

二次元ドリームノベルズ

3D 美少女 3D
リアルな舞台設定で送る
官能小説レーベル!

日常に密着したエロス、
リアルな舞台設定で送る
官能小説レーベル!

戦うヒロインを屈服させちゃう
かなり過激な
陵辱系ライトノベル!

フリタム120%!?
ジャンルにこだわらない
ドキドキキララ!

女刑事美優
美優は自らの身体で...

リアルドリーム文庫

あとみつく文庫

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプの?

二次元ぶち文庫

ハルク

あの人気作品の
外伝作品もあり!
電子書籍でしか読めないライトノベル!

「小説家になろう」の男性向けサイト
「ノクターノンノベルズ」
から書籍化!

姫騎士 クラスメイト!
ビギニングノベルズ

異世界 珠姫
デキる魔法
キララ系

ドキドキキララフな
ライトノベル系
ライトノベル!

二次元ドリーム文庫